

『男はしるべき50 お帰りの寅さん』

西都島尚友会 坂和 章平

(一) 森繁久彌の『社長』シリーズ、植木等の『日本の男』シリーズは、昭和を代表するシリーズ。『ALWAYS 三丁目の夕日』は、昭和三十三年の東京タワー建設を軸とする昭和の良き時代を象徴するシリーズ。ハマちゃん、スーさんコンビによる『釣りバカ日誌』はバブル崩壊から三十年間続いた平成を代表するシリーズだ。しかし、老若男女を問わず、日本人の誰もが令和の時代になった今帰ってきてもらいたいのは、フーテンの寅さんこと寅次郎だ。ハナ肇を起用した『馬鹿』シリーズで

貌、あのセリフ、あの口上を日本中に定着させ、あの主題歌を国民の愛唱歌にしたわけだ。私がホームページに興味のページを設け、映画評論を書き始めたのは01年。また、02年の『シネマ本』の出版から十八年、同書は四十五冊に。寅さんシリーズと同じく、「継続は力なり」だ。

松竹の新たな人情劇を作り始めた山田洋次監督が、『男はつらいよ』第一作を発表したのは一九六九年八月。折りしも、日本では学園紛争が広がり、東大の入試が中止された年だ。あの時代、一方の雄が『唐獅子牡丹』の高倉健なら、他方が寅さん。一方で「止めてくれるなおっかさん、背中のおちようが泣いている」とカッコをつければ、他方で日本中を歩き回るテキ屋の寅さんの口上に酔いしれた。私が邦画のベスト1に挙げる『砂の器』(74年)にもチラリ登場する渥美清は九十六年に死亡し、『寅次郎ハイビスカスの花 特別編』(97年)が最後の四十九作目になった。個性派俳優・渥美清は二十八年間も寅さんの役を演じ続け、あの風

(二) 二〇二〇年は、そんな寅さんがスクリーンに戻ってくる。とは言っても、アン・リー監督が最新作『ジエミニマン』でウィル・スミスの若き日をCG映像で作りに出したように、渥美清をCGで登場させるのではない。第五十作の主役は最愛の甥っ子、諏訪満男だ。妹さくらら高飾柴又のダンご屋・とらやの裏手にある朝日印刷で働く生真面目な諏訪博との恋を成就させたが、その息子が満男。当時十一歳の吉岡秀隆が、『浪花の恋の寅次郎』(81年)から演じ続けるハマリ役だ。何度も家出をし両親を困らせたが、寅さんとの相性は抜群。初恋のお相手ゴクミンこと後藤久美子演じる泉とは、『おっかさんの伯父さん』(89年)から恋模様を展開してきた。本作は脱サラして念願の小説家になった満男が、中三の娘と共に妻の七回忌の法要のため久々に実家に戻る物語からスタート。そこに寅さんはいないが、今や後期高齢者の仲間入りした両親をはじめ、あの顔、この顔が。私は17年

に寅さん記念館を訪れ、とらやのロケセットを見学したが、あの茶の間に集まり昔話に花を咲かせれば、思い出すのは寅さんのこと。満男はチラリと彼を見たような気がしたが…。

(三) クソ暑い東京ではマラソンは無理。そんなことは前からわかっていたのに、突然マラソン会場を札幌に移すと報じられた。それはどうでもいいが、切実に思うのは、くぎ付けになって見えていた64年東京五輪の重量挙げ、レスリング、柔道、女子バレー、マラソン等から早くも五十五年が経ったという現実。まさに「光陰矢の如し」だ。しかし、三十一年生まれ山田監督に比べれば、四十九年生まれの私は十八歳も若い。また、六十一年に三十歳で監督デビューした彼の監督歴は六十年近いが、七十四年に二十五歳で弁護士登録した私はまた四十六年。それなら、あと十五年、山田監督と同じように八十五歳頃までは頑張れるはずだ。七十歳にもなれば涙もろくなるのは仕方ない。本作には過去四十九作からさまざまな回想シーンが抽出されているから、その度に大粒の涙が溢れてくる。その最大の見ものは、浅丘ルリ子演じるリリーも座るあの茶の間で見せるメロン騒動。美食に馴れた昨今ではメロン如きだが、『寅次郎相合い傘』(75年)当時のメロンは貴重品。熟れ頃になったメロンを六等分し、皆が一口食べるところに戻ってきた寅さんが、「じゃあ俺も」と言い出すと…。二〇二〇年のお正月は、そこから始まる大騒動を楽しむところからスタートし、大きな福を呼び込んでもらいたい。